
真夜中の烏

アザトーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中の烏

【Nコード】

N2288Z

【作者名】

アザとーさん

【あらすじ】

落ちこぼれ死神が地上に降り立った。

彼女の使命は人間の『喜怒哀楽』を回収することなのだが……

始まりの夜

始まりの夜

申し分のない月明かりが、その夜を明るく照らしていた。こんな夜には、人ならざる者たちが宵闇の中に降臨する。今まさに、一人の少女が地上に足をつけようとしていた。背中には巨大な鳥の翼が生えている。漆黒のソレは、異界より羽ばたき続けて疲れ切ってはいたが、ふわりと優しく地上に降り立った。

「よう、クルエボ。相変わらず美しい羽根だな。」

コウモリの羽をひらめかせて隣に降り立った少年に、彼女は感情の無いガラス玉のような瞳で答えた。

「ここではその名前は不自然だ。『小夜子』と呼んでくれ。」

「小夜子ちゃんねえ。美しい名前だな。俺にもこっち風の名前、つけてくれよ。」

「『チャラ男』」

少女はそれだけ言い放つと、少年への興味を全く失ったかのようにそっぽを向き、何かをつぶやき始めた。その小さな唇の中であらしが吹き荒れるような音がもれ、巨大な翼がみるみる内に縮んで…
…ついには消えた。

翼を持たない姿は、どこにでもいるごく普通の少女と何ら変わらない。
ない。

よほど構って欲しいのか、その『変身』をじっと見ていた少年が、再び口を開いた。

「しっかし、めんどくさい事させられてんな。人間の『喜怒哀楽』を回収するんだっけ？」

「仕方ないだろう。人間の魂は、その大半が感情と言う成分でできている。だが、私にはいまだに『感情』というものが理解できない。

「そうだな、だから落ちこぼれたんだもんな。」
ストリートな悪口にも、少女はその美しい眉ひとつ動かさない。
「まあ、どうしてもダメなら？俺が嫁にもらってやるよ。」
「ありがとう、チャラ男。そうならないように善処する。」
「つれないねえ。ま、俺はその辺で適当に仕事をしてるから、困ったことがあればすぐに連絡してくれよ。」
「仕事は適当にやるものじゃない。」
「はいはい。『善処します』よ。」
少年はいかにもチャラいしぐさで、ひらひらと手を振って飛び立った。

すでに都会のネオンを移している彼女のガラスの瞳には、そんな彼の姿は映らなかった。

第1章 「喜」

小夜子は、夜のネオン街の喧噪の中をあてどなくさまよっていた。男たちは好色の眼差しで彼女を振り返るが、その神々しいまでの美しさに声をかけあぐねていた。

雑踏のにぎわいの中でも、小夜子を包む静寂が破られることは無かった。突如、勇者という名のKYが現れるまでは。

「かゝわいいね、何ちゃん、何ちゃん？」

男は酒臭い息を小夜子に吐きかけ、なれなれしく肩を抱き寄せた。

「小夜子ちゃんだ。」

彼女の答えは全く何の感情もこもっていない。質問に答えを返しただけの味気ないものだったが、その男を有頂天にさせるには十分だった。

「小夜子ちゃん。暇ならあ、カラオケとか、おじさんで行っちゃいませんか？」

「カラオケ……それに行けば、お前は嬉しいのか。」

「小夜子ちゃんと一緒ならあ、どこでも嬉しいよ。ホテルなら、なお嬉しいかな。」

彼女はしばらく黙って、頭の中でその単語を検索する。

「ああ、すまん。『そういう機能』は持ち合わせていないんで、カラオケで頼む。」

「小夜子ちゃんは、商売の人じゃないんだね。オッケー、オッケー。」

「何だか会話がかみ合っていない事すら気にせず、男は小夜子の手を引いた。」

「小夜子、先に歌いなよ！」

狭い密室で気の大きくなった男は、すでに小夜子の隣にぴったりと寄り添い、ご機嫌でマイクを突き付けてくる。

「歌はよく知らん。お前が歌うがいいぞ。」

男は不服そうに口をとがらせた。

「え〜、歌ってくんないと、おじさんつままない。」

「『つままない』……嬉しくないという事だな。お前はカラオケに行けば嬉しいと言ったのに、嬉しくないんだな。」

「そうだよ〜。つままないよ。」

「ならば、お前の『嬉しい』とはなんだ？」

男はへらへらと笑いながら小夜子にすり寄ってきた。

「え〜、女の子とこういう事が出来て、おいしいものが食べられて、後は……車！かっこいい車とか買えちゃうと、嬉しくなるかな。」

「買えばいいじゃないか。」

「わかってないな。サラリーマンって、そんなにお金持ちじゃないよ。生きていくには困らないけど、贅沢するお金なんかないんだよ。」

「お金……そうか、ここでは何をしてもそれがいるんだったな。」

小夜子は出会ってから始めて、真っ直ぐに男の顔を見た。

「お金があれば『嬉しい』か？」

「そりゃあ嬉しいよ。くれるの？お金。」

「くれてやる。これを持っている。」

小夜子は小さなストラップを取り出し、男に握らせた。

「あ〜、残念。スマホだから、ストラップは使わないんだよ。」

「ならば鞆にでもつけておけ。」

男は酔いのまわった、どろりとした眼差しでそのストラップを確かめた。何の変哲もないそのストラップのアクセントには、道端で拾ったような地味な黒っぽい石がついている。

「いやー、若いコからプレゼントなんて嬉しいねえ。」

男の瞳が、酔いでさらに淀んだ。

「いいか、肌身離さず持っているよ。」

その声は、深い酔いと眠気にとらわれた男の耳にも強く残った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2288z/>

真夜中の烏

2011年12月8日03時03分発行